2　曾畑式土器文化に関する一考察

杉村　彰一

プロローグ

縄文文化早期初頭の土器群としては，関東地方の南部，東京周辺から三浦半島方面，東京湾の西部に分布する撚糸文土器群がある。

早期縄文式土器について次のような編年がなされている。撚糸文土器群の次に無文土器群→沈線文土器群→条痕文土器群と変移する。

それでは関東地方以外の地域ではどうかというと，撚糸文土器群に並行するのではないかと考えられるものに，中部地方の一部にかけて分布する押捺文土器群が知られつつある。撚糸文土器群の終りに近い頃か，或は無文土器群になってから，北関東，中部地方から西にかけて押型文土器群があらわれる。

関東地方の無文土器群の終末になって，北海道，東北地方，関東地方の大部分にかけて沈線文や貝殻文をもった一群の土器があらわれる。

これらは早期初頭にかけてあらわれる土器群であるが，それらとは異なった土器群が九州の西部に分布する。曾畑式土器がそれである。曾畑式土器が縄文文化の成立にどのように関与しているのか，或はないのか，この問題を解決するのが，私の論文のねらいの一つでもある。

私が九州地方の縄文文化に位置する曾畑式土器を取り扱うことにしたのは，次の点からである。それは曾畑式土器文化の内容がいまだ明瞭にされていないことである。

残念ながら曾畑式土器が学術調査によって発掘された例は数少ない。学術調査によって層位を確認し，層の移り変りにしたがって各層に含まれる曾畑式土器の変移が見出せれば一等資料としてつかえるだろう。

そのように恵まれた例は少ないので現存する資料を様式によって分類し，合理的な解釈をこゝろみようと思う。

一型式について次のような理解のしかたがある[1]。『一型式aはある限られた地域で，限られた時間につくられた土器の組合せをいう。その型式aはそこで生まれ，土器を作り，用い死んだところの人間の集団を意味すると解する事が出来る。考古学的遺物を人間の歴史的遺品として把握するための最小の単元が「型式」であると。』型式の解釈を以上のようにすると曾畑式土器は再検討しなければならない。

歴史上の発展について次のことがらがありうる。一地域の文化のある時期に他の高度の文化が伝えられその内乱を通じて既存の文化が中枢部において粉砕され，それにとってかわって内乱を指導した人々の文化が新しく樹立されることもあろう。また，内乱にもかゝわらず既存の文化はその本質をかえることなくたゞ内乱を通じて既存の文化が修正されるか，あるいは再新されるか，また，崩壊への転期となるかである。それから内乱もなくそれ自体の内的な変化や発展がありうる訳である。以上のことがらが曾畑式土器文化の研究を通していえるかどうか。

九州の考古学者のなかには九州では縄文文化後期頃まで，押型文土器が存在すると考えておられたが，最近になってそうでないことが明らかにされた。私はこの押型文土器については全国的な押型文土器のあり方より考えて慎重に検討してゆく。曾畑式土器と押型文土器との関係については，学術調査に於て両者の関係が層位的に把握された資料に重点を置いて論を進める。

曾畑式土器と大陸に分布する櫛目文土器（カムケラミーク）については，多くの学者は両者の文様，

胎土その他の類似から速断に結びつけて考えられているようであるが，私は曾畑式土器文化のあり方を早く明らかにするのが急務と考える。

1　曾畑式土器の形態

一般に曾畑式土器と呼ばれているのは，次のようなものである。熊本県宇土郡宇土町曾畑貝塚から出土した深鉢形丸底土器を標式として曾畑式が設定された。細型刻文又は細直細文土器等と呼ばれる灰黒色，黄褐色を呈するもので比較的薄手のものが多く胎土に滑石粉末混入のものが多い。繊細な篦状の施文具で平行刻線，刺突文，連点文，平行沈線，三角形細線文（鋸歯文），羽状文等幾何学的文様をほどこした土器である。

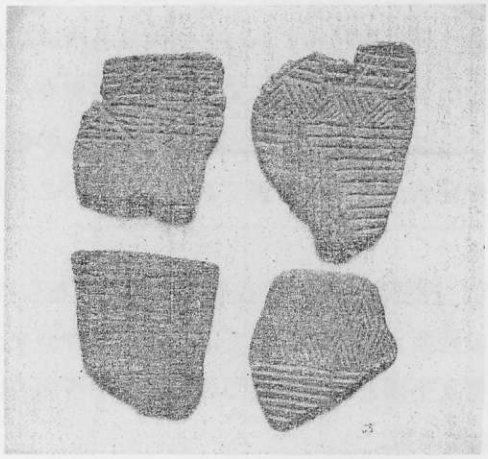
曾畑式土器は九州地方に限って出土するもので，西北部から南部（福岡県，佐賀県，長崎県，熊本県，鹿児島県）にその分布をみる。

曾畑式土器の出土例は約60ヶ所を数え，特に熊本県下の出土例は30余ヶ所にのぼる。曾畑式土器が学術調査によって得られた例は少ないので，現存する資料を様式によって分類することにした。

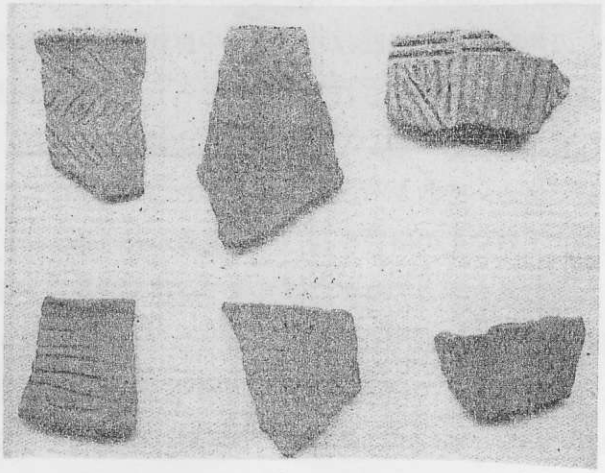
第一類は佐賀県唐津市西唐津海底から発見された曾畑式土器[2]をタイプとするものである。すべて破片であるから復元困難であるが，知りうることは次のようである。

口辺部，胴部に施される文様の組合せには規則的なものがある。口辺部は直口するものと外反するものとがあって，外反する口辺部が数を上まわる。口唇上面に刻み目がある場合は口辺部が外反するのに多い。内面に文様がある場合は外面の第一文様帯が施される。例えば外面の第一文様帯が横の平行沈線文であれば内面の文様は横の平行沈線文であるわけである。縦の平行沈線のみで文様帯を構成することはない。二本単位の鋸歯文（三角文）が施される場合それは横の沈線の上に施文されている。まれに一本単位の鋸歯文が横の沈線の上に施される場合がある。鋸歯文が文様帯を占める場合は一本単位で，鋸歯文の他の部分は斜の沈線でうずめている。鋸歯文は口辺部に限られる。刺突文（連点文に近い）が施される場合は主に口唇直下に施されている。

頸部にある場合は必ず口唇直下にも刺突文（連点文）がある。いわゆる刺突文（連点文）が口辺部になくて他の部分に施文されることはないのである。口辺部に施される最初の綾杉文は左開きであって胴部以下に施される場合，最初の綾杉文は右開きである。



1．佐賀県唐津海底発見（松岡氏蔵）



2．熊本県曽畑貝塚出土（熊本市博物館蔵）

底部は平底に近い丸底と，丸底がある。前者の文様はいわゆる蜘蛛巣状を呈し，後者の場合は横の沈線である。

おそらく器面全体に文様が施され，全ての土器中に滑石粉末を含み，篦状の工具で施文したものといえる。しかも施文具は篦状のもの一種類と考えられる。唐津海底出土の曾畑式土器をいくつかに分類する必要はないと考える。唐津海底出土の中に大陸に分布を示す櫛目文土器とまったく同一の土器が5，6片ある。

第二類とするのは，熊本県宇土郡宇土市曾畑貝塚出土の曾畑式土器[3]である。形態はわずか口唇部の肥厚したものがあり口辺部のやゝ外反するものと，直口するものと二種で胴部は弯曲しない深鉢である。底部は丸底と平底がある。文様は篦状の先端で平行する沈線を横縦斜に組み合せたものと，竹管先端で施文した連点文，刺突文等である。口辺部の上面から胴部の下面まで文様が施される。わずかながら地文に条痕を残し，意匠文として曾畑式土器の特徴である幾何学的文様が施される。曾畑貝塚から出土した曾畑式土器に胎土に滑石粉末の混入しているものと，そうでないものがあるがいずれも文様上の相異は見出せない。

外面の文様はやはり第一類と同じく組み合せには規則的なものがある。内面の文様について述べると，外面の第一文様が内側の文様と同一なもの。外面の文様は横走する沈線に斜の沈線が加わった文様で，内面は横走する沈線であるもの，また，外面の文様は横走する沈線で内面は横の沈線に斜の沈線の加わったもの。その次に外面の文様と内面の文様が違ったもの等である。

第三類とするのは鹿児島県大口市山野日勝山出土の曾畑式土器[4]である。採集された土器片はいずれも小破片であって復元困難である。詳細に検討するとおそらく平坦な垂直線をなし胴部はやゝ張って底部は丸底を呈する鉢形の土器であったと思われる。文様は横縦斜の沈線を組み合せたもの，連点文，刺突文，曲線文等に大別される。これらの文様が相互に組み合さって文様効果を上げている。曲線文が多量に出てくるのは日勝山の特色である。連点文及び刺突文は主として口辺部近くに横位二列及び三列に施されており口辺部の文様を構成している。この種の施文方法はおそらく篦状の先端等を使用して刺突されたものと思われるが，一部植物の茎を横断し，その篦状の横断面を押圧して施文したと思われるのがある。

2　曾畑式土器の編年的位置

曾畑式土器の編年的位置を考えるにあたって押型文土器，貝殻条痕文土器等について述べてみる。

昭和33年，4年に佐賀県小城郡東分竜王遺跡[5]が調査され次のような層位が確認された。だいたい5層から成りたっていた。第1層の耕土は淡灰黒色土で遺物はほとんど見られない。第2層は主に御領式を出す層で，第3層は主に阿高式が出土し数片轟式も出土している。第4層は曾畑式の出土の層で同層の下位から押型文土器（楕円文で器壁は厚く，楕円文は比較的大きい）が数片出土している。最下層の基盤は帯黄褐色砂層であった。

昭和34年10月江坂輝彌氏等が熊本県曾畑貝塚を調査されて次のような成果をおさめられた。貝塚は6層からなっていて第1層は15～20センチメートルで無遺物層であった。第2層は5～10センチメートルの厚さで第1貝層と呼んでいる。土器は鐘崎式に近い土器片，市来式に近い文様をもつ土器が出土した。これらの形式の土器は第1貝層（第2層）直下の第3層の上面からも発見されている。第3層は小石を混えた黒褐色土層であった。第4層（第2貝層）は少々小石を混えて厚さは30～45センチメートル前後

南部九州縄文時代編年表

早期	押型文文化	
	轟下層	
	曾畑	石坂
	沖の原	
前期	日木山	
	轟上層	石坂
		手向山

であった。第５層は褐色土層で40～50センチメートルの層である。第６層は紅灰色で小石を混えた粘土の基盤であった。

第３層下部から第４層（第２貝層）と第５層上面にわたって曾畑式土器が多量に出土した。第５層の上半分からは，表裏に篦状で施文した結果出来た細隆起線の土器が出土した。第５層には曾畑式土器，貝殻条痕文土器，押型文土器が出土したのである。この押型文土器は平底で円筒形をした深鉢であろうと思われる。阿高式土器の出土はなかった。曾畑貝塚に於ては押型文土器は曾畑の層より下層より出土したのである。押型文土器自体は新しく熊本市カブト山出土の押型文と同時期と思われる。

佐賀県多久市西多久板屋綿打遺跡[6]では曾畑式土器出土の層より下層から押型文土器の出土があった。福岡県小倉市平尾台御花畑[7]では曾畑式土器がやはり押型文土器より上層から出土している。

以上数カ所の例をあげてみたが，曾畑式土器は押型文土器文化の後に位置すると思われる。

貝殻条痕文土器の出土は九州全土にわたっている。曾畑式土器が出土するところはだいたいに於て貝殻条痕文土器の出土がある。唐津海底，竜王遺跡，長崎県平戸，福岡県沖の島，曾畑貝塚，日勝山遺跡，鹿児島県手向山遺跡，熊本県轟貝塚，同沖の原貝塚。

同じ貝殻条痕文土器と云っても特に九州南部に分布を示す吉田式は貝殻腹縁文で，石坂式と云われる土器は口辺部の文様は貝殻腹縁文で胴部は貝殻条痕文の土器である。

曾畑式土器はこの貝殻条痕文である石坂式，吉田式と同一層から発見された事はない。

昭和33年７月熊本県宇土市宇土町宮之庄轟貝塚を調査された松本雅明熊大教授は次のような事を報告された。比較的原状を保っていた層については６層からなっており第１層は貝の細片を交えた表土。第２層はカキを主とした純貝層であり，第３層は混土貝層。第４層はアカガイを主とした純貝層であり，第５層は黒土層，第６層は黄土層（基盤）であった。各層から出土する土器をあげると第２層から阿高式，第３層の下半部から轟式と云われるものが出土した。同層から出土した轟式土器は地文に貝殻腹縁文を有しその上に土をはりつけた云わゆるミミズばれの土器であった。第４層からは貝殻や篦状の先端で突いて出来た連点文，爪形文の土器が出土した。第５層出土の土器は第４層とほぼ同一土器であった。

轟貝塚に於て轟式土器を分類することは出来なかったが，たゞ傾向として云えることは轟式を包含する層で上半部から，地文に貝殻条痕を持ちその上に指で土をはりつけて大きな強いすじをつけ，そのミミズばれの大きな文様を示す轟式土器が出土したこと。その下半部から曾畑式土器と，平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が出土した。これより下層に土器がごく柔らかい時貝殻の先端や篦の先で表裏を引きかき，ミミズばれが出来たもの。この文様をもつ尖底土器２個が出土した[8]。

轟貝塚においては，最下層の貝殻条痕文土器が出土する上層に曾畑式土器と，曾畑式土器の伝統と考えられる土器が存在した事実は認めなくてはならない。伝統の残る土器については後述する。

昭和34年８月熊本県天草郡五和町沖の原貝塚の調査[9]が行われた。沖の原貝塚は５層からなっており最下層から曾畑式土器数片，轟貝塚において曾畑式土器と同一層から出土したところの平行する沈線を主体とするがその間にアルカ属の貝殻口唇を押捺した文様を配した土器が，沖の原貝塚に於ても出土した。貝殻腹縁で押捺した土器（この土器と類似したものは鹿児島県日木山遺跡から出土している）と地文に貝殻文を施文しその上に隆起文を配したミミズばれ土器，いわゆる轟式が出土した。最下層からは

大きく分けて曾畑式土器片と曾畑式土器の伝統の残るところの地文に貝殻条痕を施し，平行沈線のある土器とそれに貝殻腹縁文土器が同一層から出土したことである。轟貝塚でも曾畑式土器数片と，曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土した。轟貝塚でも沖の原貝塚でも曾畑式土器と曾畑式土器の伝統の残る土器は同一層から出土し，しかも曾畑式土器よりも曾畑式土器の伝統の残る土器が数に於て圧倒的に多かった。轟貝塚に於ては曾畑式土器の伝統の残る土器の出土する上層からミミズばれの轟式が出土した。沖の原貝塚に於ては同層からミミズばれの轟式と曾畑式土器，曾畑式土器の伝統の残る土器，それに日木山式土器に類似する貝殻腹縁文土器が出土し，いわゆる日木山式的なものが他の土器よりも圧倒的に多く出土した。轟貝塚と沖の原貝塚の両貝塚に於ていえることは曾畑式土器の伝統の残るのは貝殻腹縁文土器であって，曾畑式土器の要素であった沈線は時とともに貝殻腹縁文に圧倒され消えていく。曾畑式土器の伝統の残る土器文化について一型式もうけていゝかどうかわからないが，私は沖の原文化期と呼んだらどうかと考えている。この沖の原文化こそ日木山式土器文化につながりミミズばれの土器つまり轟式文化を産み出す基調が芽ばえていたと考える。

私は前頁のような編年をこゝろみた。

3　曾畑式土器文化の様相

九州西部に限って分布を示す曾畑式土器文化は縄文時代早期末に比定されるべきものであった。曾畑式土器文化は押型文土器文化，貝殻条痕文土器の後に位置する文化であった。曾畑式土器文化は押型文土器文化，貝殻条痕文土器文化から自然的な形で発生したものではなく九州に於て押型文文化が終り，貝殻条痕文土器文化にはいり一部の地域でその発展を呈しようとした時に，曾畑式土器文化は外来したものと思われる。

曾畑式土器の由来を日本内に求めることは困難である。私は朝鮮全土に分布を示す櫛目文土器に曾畑式土器の粗形を求めるものである。櫛目文土器と曾畑式土器との文様は完全に一致するものではない。南鮮の櫛目文土器人が島づたいに九州にやって来て，その文化を伝えたのであろう。貝殻条痕文土器人に外来者の櫛目文土器人は，篦状の施文具によって施される幾何学的文様を地文に篦状の施文具で引きかいて出来る条痕を伝えたのであった。唐津海底出土の遺物はこのような状態をよく表わしたものと理解される。貝殻条痕文土器人が櫛目文土器人の真似をして作った土器がいわゆる唐津海底出土の曾畑式土器であろう。内面に篦状で引きかいた擦痕文と貝殻条痕文があり外面に幾何学的文様を施した土器がこれである。これを仮に曾畑の第１期と呼ぼう。唐津海底出土の曾畑式土器が１本の篦状のものであるのに対して櫛目文土器は櫛状の数本のもので施文されている。将来に於て唐津海底出土の曾畑式土器よりも一段階櫛目文土器に近い土器が発見されるかも知れない。

朝鮮から伝えられた櫛目文土器[10]を自分のものに消化したのがいわゆる曾畑貝塚出土の曾畑式土器に代表される土器ではないだろうか。これを第２期としよう。第２期の文化はかなり曾畑期の中でも広範囲にわたっている。

曾畑式土器の特長的文様であつた幾何学的文様が乱れ曲線化し曾畑文化期も下り坂をむかえる時期が日勝山にみられる土器ではないだろうか。これを第３期と呼ぶ。

第１期から第３期までを曾畑式土器文化期とする。この曾畑文化期は時間的にかなり短い時期であったのではなかろうか。それは貝殻条痕文文化期と貝殻腹縁文文化期の間に位置した事からもいえる。押型文文化期が終りを告げ，貝殻条痕文土器文化期になった直後に曾畑式土器文化が存在したと解した方

が合理的であるように思う。貝殻条痕文土器，貝殻腹縁文土器，ミミズばれの轟式等が強い関係にある以上ある地方では曾畑式土器文化期になってからもこれら広義の貝殻文土器文化は何らかの形で脈々と続いていたのかも知れない。すると曾畑式土器文化期と並行して存在したと思われる貝殻文土器文化は何であろうか。鹿児島県下から出土する石坂式土器文化ではないかと思っている。曾畑式土器と一緒に石坂式土器が出土しないことは並行関係を示すものかも知れない。九州も縄文時代前期初頭になって日本の縄文文化のあり方と歩調を合せて横の連絡をしながら発展するのである。

曾畑式土器文様の発展をみるとまず鹿児島県大口市，熊本県人吉市に分布する手向山[11]式がある。手向山式土器文様構成をみると，押型文，縄文，撚糸文，条痕文，轟式，曾畑式土器の各土器文様を踏襲している。手向山式土器の分布は前述の大口市，人吉市つまり盆地状の所に分布するのである。

他に曾畑式土器文様の伝統は阿高式土器とよく云われるが曾畑式土器文化と阿高式土器文化との時間的間隔が大きい。

曾畑式土器文化は縄文早期に於て全国的な変移を示す撚糸文土器群，押型文土器群，沈線文土器群，貝殻条痕文土器群という文化の推移の型として生まれたのではなく，本来外来文化であったのである。

しかしその文化は九州全土に広まることなく，九州の西北部から南部にかけて一時期他の文化を圧してしまうのである。だが全国的な力でおしよせて来る広義の貝殻条痕文土器文化に吸収されてしまい，影をひそめてしまうのである。

本来ならば外来文化は既存の文化を指導する例が多いように思えるけれども，曾畑式土器文化については，伝える側の立場と受入れる立場とが一致していなかったと云えるのではないかと思う。

曾畑式土器文化期内に於て内的な変化はあったが，九州の縄文文化の発展に影響したかどうかの判断については現在のところ何とも云えない。

註

（1）芹沢長介氏。
（2）図版１松岡史氏所蔵。
（3）図版２熊本市博物館蔵。
（4）木村幹夫氏「薩摩国伊佐郡日勝山土器について」考古学７－９　昭和11年。
（5）「佐賀県小城郡三日月村大字東分竜王遺跡について」教育佐賀　昭和33年。
（6）松岡史氏教示。
（7）隈昭志教示。
（8）その後，松本雅明・富樫卯三郎氏「轟式土器の編年―熊本県宇土市轟貝塚調査報告―」考古学雑誌　第47巻第３号　昭和36年12月　が発表された。そこではミミズばれの縄痕文を曾畑式より古いとされているが，本稿においては充分利用できなかつた。
（9）乙益重隆氏，坂本経堯氏，田辺哲夫氏，調査（未報告）。私の卒論のために特に許しを得た。
（10）藤田亮策氏「朝鮮考古学研究」昭和23年。
（11）賀川光夫氏　日本考古学講座３昭和31年。

（『熊本史学』第23号，熊本史学会，1962年）